

## V119b 高萩・日立 32 m 電波望遠鏡の整備・運用状況 2023B

米倉覚則, 田辺義浩, 森泉怜, 古川真祐子, 百瀬宗武 (茨城大), 孫赫陽, 抱江柁利, 小川英夫 (大阪公大), 元木業人, 新沼浩太郎, 藤沢健太 (山口大), 須藤広志 (岐阜大), 久野成夫 (筑波大), 中川亜紀治 (鹿児島大), 本間希樹, 小林秀行 (国立天文台), 他 JVN 関係者

茨城大学が運用する国立天文台水沢 VLBI 観測所茨城観測局 (日立 32-m アンテナ、高萩 32-m アンテナ) では、VLBI 観測を 6.7, 8.4, 22 GHz において実施するとともに、6.7, 12.2 GHz メタノールレーザー源の単一鏡モニター観測、日立-高萩電波干渉計による連続波高感度観測等を実施している。日立アンテナは 1 年を通して 6–9 GHz 帯受信機を搭載し、モニター観測を毎日実施している。高萩アンテナは、9 月から 6 月は 22 GHz 帯受信機を搭載し、東アジア VLBI 観測網 (East-Asian VLBI Network [EAVN]) の共同利用観測などに対応する。EAVN 共同利用観測には、22 GHz 帯において年間 100 時間、6.7 GHz 帯において年間 100 時間を提供している。

2023 年 1 月に日立 32-m アンテナに広帯域冷却受信機 (6.5–12.5 GHz) を搭載した (知念他 2023 春季年会) 事を受け、2023 年 2 月末から 12.2 GHz メタノールレーザーのモニター観測を開始した。現在は、冷却受信機出力を 2 分配した後、既存の 6.7 および 8.4 GHz 帯常温 IF 系と、仮設置した 12.2 GHz 帯常温 IF 系に入力している。これらは band pass filter を使用しているため、受信可能な周波数帯は固定である。今後、冷却受信機出力を 4 分配した後、6.7, 8.4, 12.2 GHz およびサイドバンド分離型 IF 系 (受信周波数可変) に導く IF 系を新規製作する。これにより大質量星の形成過程における「アクリションバースト」の発生時においてのみ検出例のあるメタノールレーザー (7.6, 7.8 GHz など) の観測に即応できるようにする。(本研究は、国立天文台大学間連携プロジェクト「国内 VLBI ネットワーク事業 (JVN)」、JSPS 科研費 JP21H01120、JP21H00032 の助成を受けた)。